

君待つと

万葉集

授業プリント1

○成立・・・①(奈良)時代末期

○歌の数・・・約②(四千五百)

○特徴・・・現存する③(日本最古)の歌集。

天皇・貴族・兵士・農民にいたるまで幅広い階層の人々の

④(素朴)な感動が、生き生きと力強く歌われる。

五七調(ますらをぶり)

ア(じ)

持統天皇

春過ぎて 夏来るらし / 白たへの 衣乾したり / 天の香具山

枕詞

体言止め

【大意】春が過ぎて、夏がどうやら①(來たらし)。

②(真っ白)な衣が干してある。天の香具山に。

《句切れ》・・・③(二句切れ・四句切れ)

【表現】・・初夏の山||④(緑)と衣||⑤(白)の対比

⑦⑥「体言止め」: 体言で切り余韻を残す技法

⑦一 枕詞

」: ある言葉を引き出すための前置きで

五音でなる。

柿 本 人 麻 呂

東の野に 炎の立つ見えて カへり見すれば月傾きぬ

【大意】東方の野には⑧(あけぼの)のさしそめるのが見えて、西を

振り返ると、⑨(月)が傾いて淡い色をたたえている。

《句切れ》・・・⑩(句切れなし)

【表現】・・季節は⑪(嚴冬)の⑫(早朝)

恋歌

万葉

額田力(おほきみ)

恋人を
君待つと 吾が恋ひをれば

我が屋戸の すぐれ動かし 秋の風吹く

【大意】わが君をお待ちして⑬(恋しく思つて)いる)と、私の家

の戸口のすぐれを動かして、秋の風が吹いてくる。

《句切れ》・・・⑭(句切れなし)
【表現】・・「君」とは⑮(天皇・恋しいあなた)を指す。

君侍つと

授業プリント2

あめつち

天地の

分かれし時ゆ

枕詞

ア(ん)

イ(とう)

山部赤人

駿河なる

富士の高嶺を

枕詞

カ(ね)

高く貴き

渡る日の

影も隠らひ

照る月の

光も見えず

白雲も

い行きはばかり

倒置法

オ(ん)

時じくそ

係り結びの法則

雪は降りける

語り継ぎ

言ひ継ぎ行かむ

不尽の高嶺は

高く

〔大意〕

天と地が分かれた神代の昔から、①（神々しくて）高く
貴い、駿河（静岡）にある富士の高嶺を、大空はるかに

②（振り仰いでみる）と、空を渡る太陽の光も隠れ、

照る月の光も見えず、白雲も山にはばまれて行きとどこお

り、③（時を選ばずに）雪が降っている。

いつの世までも語り継ぎ、言い継いで④（いこう）、

この富士の高嶺のことを。

【表現】

⑤「対句法」・・語句を一対に配置し、対照的に表現す

ること

「渡る日の・・照る月の・・」

⑥「係り結びの法則」・・係助詞⑦「そ」がくることで

結びが、「けり」の連体形⑧「ける」になる。

倒置法

「文の成分の位置を入れ替えて印象づける。

反歌 ⑩（長歌の後に詠み添える歌）長歌の意味を、要約し
たり、補足したりする*長歌（五七五七五七・・・五七七）。

眞白にそ

不尽の高嶺に 雪は降りける

〔大意〕

田児の浦を通つて、視野の開けた所へ出て見ると、真っ白に
富士の高嶺に雪が降り積もつていてことだ。

係り結びの法則

萬葉三歌人（「萬葉集」の中での代表歌人）

柿本もとまろ（東の・・・）
山部あかひと（天地の・・・、田児の浦ゆ）
赤人（萬葉第一の歌人と称される。憶良らは）

萬葉もとまろ（萬葉集の中での代表歌人）
人麻呂（自然を題材にしたものが多く、人麻呂と並び称されている。憶良らは）

思想性と温かい人間愛。人生詩人と言われる。（憶良らは）

君侍つと

授業プリント3
家族愛
アヤマツエの
山上憶良

イ(ん)
エ(う)

憶良らは 今は罷まからむ /

オ(ん)
吾わを待つらむそ

子泣くらむ / そを負ふ母も

【大意】 私、憶良めはもうこれで①（退出しましよう）。家では今ごろ子供たちが泣いているでしょうし、②（ その子供）を背負つている母も私を③（ 待つているでしょうから）。

《句切れ》・・・④（ 二句切れ・三句切れ）

多摩川に さらす手作り / 二句切れ

序詞

クあづ
東歌

さらさらに 何そこの児の ここだ愛しき

【大意】 多摩川にさらす手作りの麻布のように、⑤（さらさら）

どうしてこの子がこんなにも⑥（いとしい）のだろうか。

【表現】 ⑦「係り結び」・・係助詞⑧「そ」がくることで結びが、「愛し」の連体形⑨「愛えししき」になる。

⑩「序詞」：他の言葉を引き出す前置きで七音以上。

⑪（さきもりのうた）

防人歌

父母が頭かしらをかき撫ななで 幸くあれ ていひし言葉ぜ 忘れかねつる

【大意】 父母が頭を撫でて⑫「達者でいろや」と言つた言葉が忘れられない。

【表現】 ⑬「係り結び」・・係助詞⑭「ぜ」がくることで結びが「つ」の連体形⑮「つる」になる。

主に東国出身者が多かつたため、なまりが強い。

↓⑯「て、言葉（けとば）ぜ

防人の歌

辺境（主に北九州）の防備に三年の任期で集められた農民や残された家族の作った歌。東国（静岡県より東）の人が多く、家族への強い愛情を歌っている。

君侍つと

授業プリント4

ア(おほ)ものやかもち
大伴 家持

春の園 イ(い)(おう)
紅にほふ 桃の花 下照る道に 出で立つをとめ

の

まで

【大意】

春の園の、紅色に美しく咲いている桃の花の、下まで照り輝く道に出て行つて立つ①(娘)よ

【表現】上の句で②(桃の花)、下の句で③(乙女)の美しさを歌つてお互いを引き立て合う。

④「体言止め」：最後を体言で結び、意味を強めたり、余韻を残す技法

《句切れ》・・・⑤(句切れなし)

十口文の三日葉未追い

*古文では、現代語に比べ、助詞(が・を・は・など)を使用するごとが少なく、現代訳をする際には、その前後からその間にに入る助詞を補わなければならない。

春(が)過ぎて夏(が)来るらし 白榜の衣(が)乾(ほ)したり

天の香具山

東(ひむかし)の野に炎(かぎろひ)の立つ(のが)見えて かへり見すれば 月(が)傾(かたぶ)きぬ

君(を)待つと吾(わ)が恋(こ)ひをれば 我が屋戸のすだれ(を)動(か)かし秋(かみ)の風(が)吹く

天地(あめつち)の分かれし時ゆ 神さびて高く貴(たぶと)き 駿河なる布士(ふじ)の高嶺(たかね)を

天(あま)の原(を)振り放け見れば 渡る日の影も隠(かく)らひ 照る月の光も見えず

白雲(しらくも)もい行きはばかり 時じくそ雪(かたづ)は降りける

語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ 不尽(ふじ)の高嶺は

憶良(おもか)らは今は罷(まか)らむ 子(が)泣(な)くらむ そを負(お)ふ母(は)も吾(わ)を待(まつ)らむそ

父母(かしら)が頭(を)かき撫(なな)で幸(さい)くあれていひし言葉(ことば)ぜ忘れかねつる

春(その)の紅(くれなゐ)にほふ桃(の)花(の)下(まで)照(て)る道(に出で)立(つ)をとめ

君待つと

古今和歌集

授業プリント5

「古」は万葉集を指す

○特徴・・・天皇の命令（勅命）によって作られた、最初の

①（勅撰和歌集）

春・夏・秋・冬・②（恋）に分類

七五調（たをやめぶり）

さあ

人はいさ 心も知らず

/二句切れ

紀貫之

ふるきとは 花ぞ昔の 香にほひける

ア（おい）係り結びの法則

【表現】人（ひと）の心は変わったかもしねれない。

だが、昔なじみのこの家の（家）（梅）の花は、昔のままの香りを香らせて美しく咲いていますね。

【表現】⑤「係り結び」・・係助詞（ぞ）がくる」とで結びが、

〔対比〕変わりやすいもの（人）（人の心）

変わらないもの（花の香）

イ（じわ）藤原敏行

ア（お）小野のこまち

六歌仙

秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかねぬる

句切れなし

【表現】秋が来たと、目には（はつきり）と見えるのではないが、（風の音）にはつとして気づかされたことであるよ。

【表現】⑫「係り結び」・・係助詞（ぞ）がくることで結びが、

〔表現〕⑬「ぬ」の連体形（ぬる）になる。

イ（い）感動の（よ）が 思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ

ウ（ん）ア（お）小野のこまち

六歌仙

夢と知りせば 覚めざらましを

【大意】あの人を心の中で思いながら眠りについたので、夢にふと（現れたのだろうか）。それが夢と知っていたならば、わたしは（目を覚まさなかつたのに）。それが夢と知っていたならば、作者は、普段、この「人」（恋人）に逢えなかつたので、はかない（夢）にすがつても逢いたいというやるせない恋の思い。

君侍つと 新古今和歌集

授業プリント6

○成立・・・①(鎌倉) 時代初期

○歌の数・・・約②(千九百八十) 首

○特徴

・・・後鳥羽上皇の命令(勅命)によつて作られた、八番目

の③(勅撰和歌集)。

西行 法師

が

道の辺に 清水流る 柳かげ／三句切れ

「しばし」とてこそ 立ちどまりつれ
「大意」道のほとりに清水の流れている柳の木陰よ。④「(しばら
く休もう)」と思つて立ち止まつたのだつたが、あまりに

【表現】⑤(涼しいので)、思わず時を過ぎしてしまつた。
⑥「係り結び」・・係助詞⑦「こそ」がくることで結

・西行 法師：生涯を旅の歌人として送り、後に影響を与えた。
↓江戸時代の俳人⑨(松尾芭蕉)への影響

ウ(じわ)
藤原定家(え)

見わたせば 花も紅葉も オ(じ)
浦の苦屋の 秋の夕暮 カ(う) もみぢ
見わたらせぬ なかりけり／三句切れ

浦の苦屋の

秋の夕暮

体言止め

「大意」見わたすと、色美しい⑩(花)はもとより、秋にふき
わしい⑪(紅葉)すらもないことだ。苦葺きの海女
の小屋のみが目にとまるこの浦の秋の夕暮れは。

【表現】⑫「体言止め」

最後を体言で結び、意味を強め

⑬「幽玄」・・貴族的な華やかな美ではなく、寂しさを中心としたわびしさの美しさ
⑭「本歌取り」・・有名な古歌の一部、イメージを、それとわかるように歌の中で用い、歌の背後に古歌のイメージをだぶらせる表現技法。

《句切れ》・・・⑮(一二句切れ)

・藤原 定家：「小倉百人一首」や『新古今和歌集』の選者・中心人物。

君侍つと

授業プリント7

ア(よ)
式子内親王

初句切れ

玉の緒よ／ 絶えなば絶えね／ 二句切れ

ながらへば忍ぶことのよわりもぞ する
ながらへば忍ぶことのよわりもぞ する

【大意】わたしの①（命）よ。絶えるのなら絶えてしまえ。生き続けたなら、恋心を隠す心が弱つて、人に②（隠し続け）ことができなくなるだろうから。

【表現】③「係り結びの法則」・・・係助詞④「ぞ」がきて結びが「す」の連体形⑤「する」になる。

⑥「縁縁語」・・・一つの言葉に縁のある語を使う。
ここでは「緒」に縁のある⑦「絶え」、⑧「ながら」、

⑨「よわり」。

《句切れ》・・・⑩（初句・一句切れ）

枕表現確認
枕表現確認
枕表現確認
枕表現確認

序詞の上に五音からなり、ある語句を導き出すために、前置きとして用いられる修辞的な言葉。

例 からころも→着る、裾

白榜の→衣

天の原→ふりさけみる

対句 意味の対照的な同形式の語句を前後に対置して、リズム感を出す。

例 「渡る日の影も隠らひ」と「照る月の光も見えず」など

対句

体言止め 一首の末尾を体言（名詞）で終わらせるもの。

例 「・・天の香具山」「・・をとめ」「・・秋の夕暮」など

体言止め

倒置法 主語と述語などの順序を逆に叙述する技法。

例 「語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は」

倒置法

本歌取り すでにある古歌（本歌）の語句を意識的に取り入れる技法

例 「見わたせば・・・」の歌。

縁語 一つの言葉に縁のある語を使う。

例 「玉の緒よ」の歌 「緒」に関連する「絶え・ながら・よわり」

係り結びの法則 「ぞ・なむ・や・か・こそ」が来れば、文末が変わる。